

日米医学医療交流財団 留学助成

研修報告書 (2015年度 助成者)

作成日 2015年 9月 13日

氏名	玉井 夢果
研修先機関名	<u>Hawaii Tokai International College</u>
研修期間	2015年8月17日(月)～22日(土)
大学名	山形大学
学年	5年

このたび日米医学医療交流財団様の助成をいただき、1週間の医学部夏期集中医学英語研修に参加させていただきました。

参加を希望したのは、他の語学留学と異なり医学英語を学ぶ機会であることと、海外で働きたいと考えている仲間と出会いたかったためというのが大きな理由です。

1週間経て最も重要だと感じたことは、問いかけの能力です。今回のプログラムでは医療面接のワークショップ、医療倫理のディスカッション、医療施設の見学を経験しましたが、すべての場面で、「問う」ことに関して学ぶ余地が大きかったと感じています。

まず医療面接では、質問のテクニックを学びました。一般的な OPQRS も、患者との英語のやり取りの中で聞き出そうとすると、非常に苦戦しました。質問の仕方に関しても、違法な薬物について、性についてなど、婉曲すぎず自然な言い回しを講師の先生方やハワイ大学の学生からアドバイスしていただき、便利なフレーズをいくつも持ち帰ることができました。また、患者に不明な点を問い返すことがいかに重要であるかを知ったのは、大きな収穫でした。

医療倫理のディスカッションでは、発言が乏しく議論がなかなか進まない場面が多くありました。しかしそういった中で、論点を明確にし、他の参加者に意見を問うことでディスカッションを前進させてくれた参加者がいました。きらりと光る「問う」力だったと思います。

また、施設見学の際「もう質問はないのですか」と尋ねられることがしばしばありました。参加者一同、アグレッシブさが足りなかったのではないかと感じています。質問することは自分のモチベーションをアピールする手段であり、相手からより豊かな情報を引き出すチャンスである ことを理解して臨むべきであったと考えました。

プログラムの最初に、講師の先生から「もっと英語を勉強しなくては、という段階ではない。来たからには、持っている英語で勝負して」とお言葉をいただき、1週間使える武器をフル活用することに徹しました。言語を問わず生かせるような医療面接とケースプレゼンテーションの訓練をすることができ、非常に充実した研修でした。

多くの参加者は間近に海外の大学での実習を控えており、留学についての情報も得ることができました。また、USMLE 受験へ向けて取り組んでいることや、受験時期を含めた卒後のプランなども話し合えたことは良い機会でした。普段自分の大学内だけで生活していると、海外は非常に遠く感じてしまっていました。しかし、学生のうちから海外留学することは珍しくないを知り、情報力と計画性の重要性を痛感しました。私の場合、学生の間での留学を計画することは、期間の都合上すでに困難かもしれませんが、海外で働くことについて、より鮮明なプランをもっていきたいと考えています。さらに、大学内で海外に興味を持つ友人たちと、今回得た情報を共有していきたいと考えます。

本プログラムでお世話になった皆様に、心から感謝いたします。ありがとうございました。